

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報 2016.09.30

NO.25

- 理事長あいさつ 日本学校教育相談学会栃木県支部理事長 柴 一彌
- 平成28年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会
- カウンセリング特別講座「発達障がいと不登校」 講師：F R教育臨床研究所所長 花輪敏男 先生
- 第28回日本学校教育相談学会総会・研究大会（岡山大会）
- とちぎ教育相談カフェの紹介
- 栃木県支部事務局からお知らせ

○ 「後樂園と鳴子のマスター」



日本学校教育相談学会栃木県支部理事長 柴 一彌

今年の中秋の名月は天文学的には9月15日ではないのだそうです。30時間後の9月17日に完全な「まん丸お月さん」になるなんてみなさんご存じでしたか。平成28年度も半分経ってしまっているのに今頃こんな話題で新年度の挨拶をすることへの申し訳なさ、十五夜だけに丸く収めようとしている私の心情をどうぞご理解願います。

さて8月6日、岡山全国大会の合間に日本三大名園の一つ「後樂園」に出かけてみました。栃木の暑さとは、ひと味、ふた味違った炎天下の園庭はさすがに人もまばらでした。300年前に岡山藩主の池田氏が作らせた名園です。背景に岡山城を抱えた構図になっていて絶景でした。でも邸内はこぢんまりとして質素な印象でした。以前訪ねた水戸の偕楽園、金沢兼六園で感じたのはずいぶん財を費やしたのだろうというイメージです。そこと比べると対照的な岡山後樂園でした。飾らないという表現がふさわしいのです。井田（せいでん）という田んぼがまだ残っていて、のどかでどこか懐かしい田舎の風情が漂っていました。「名園に田んぼが残っているなんて」と思いましたが理由は分かりません。3代目藩主は儉約家であったとパンフレットにあるのでそのせいかと勝手に思っています。

同じ8月の下旬、別の学会総会のために仲間と山形に出かけ、その帰り道に宮城県境の鳴子温泉に立ち寄りました。初めての訪問でした。名だたる温泉地です。バブル時期はさぞかし大賑わいだったのだろうと思わせるに十分なホテルが数棟残っています。散歩中温泉町にしては珍しそうな喫茶店が目につき、一休みのコーヒーのつもりで寄ってみました。

店内はわらび餅の土産屋も兼ねていましたが、音量を絞ったビートルズナンバーが静かに流れていました。するとマスターが注文を取りに来たのですがそのマスターがかっこよいです。嫌みなく私達に話しかけてくるその風情はセンスの良さを感じさせてくれます。そして懐かしい「アンティーク昭和」の匂いを漂わせているのです。時間を忘れ会話を楽しんでいると「一曲弾かせてください」とエレキギターをカウンターの陰から持ち出し、電源は入れずにマスターの弾き語りが始まるのです。至極のときが流れた一コマでした。帰り際に「5年前の震災後、すっかり寂しい町になったけど私はわらび餅屋5代目当主です。いつまでもここに残るつもりでいます。また来てください」と静かに語ってくれました。寂れた温泉街の中にあっても、地域を愛してやまないこのマスターの出会いがとても強烈な思い出になっています。

この夏の岡山後樂園と鳴子のマスターとの出会いが今年度後半の活動のお守りになってくれるような気分です。

○ 平成28年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会

平成28年6月4日(土)午後1時から栃木県教育会館5階小ホールにて、平成28年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会が催されました。当日はカウンセリング特別講座・合同研修会に花輪敏男先生をお招きすることもあって、多数の会員が参加した中での第27回の総会となりました。

初めに柴先生が新理事長になられて1年間を振り返って挨拶が述べられた後議長が選出され、下記の内容で議事が進行していきました。

- 【議事】
- (1) 平成27年度事業報告
 - (2) 平成27年度決算報告
 - (3) 会計監査報告
 - (4) 平成28年度事業報告案
 - (5) 平成28年度予算案
 - (6) その他



なお、昨年度は会員の皆様の会費収入が満額に至らず予算を下回りましたものの、「発達障害セミナー」の参加者が定員を上回り収入の増額に繋がりました。支部会の運営には会費とセミナーの参加費等が収入源となりますので今年度も会員の皆様の御協力をお願いいたします。

支部役員は今年度昨年の方々に加え、新しく監事として伊澤孝氏が加わることが決まりました。

平成28年度も特別講座・研究会を企画運営いたしておりますので、会員の皆様奮って御参加ください。

<新役員就任あいさつ>

この度、日本学校教育相談学会栃木県支部監事を仰せつかりました、伊澤孝です。宇都宮市で小学校の担任をしています。

教育カウンセリングとの出会いは、筑波大学社会人大学院教育研究科カウンセリング専攻への内地留学でした。日本カウンセリング学会理事長田上不二夫先生から、諸々の技法、主にグループカウンセリングを学び、以後、それらのツールの有効性に私自身が助けられています。どれほどの仕事ができるか、とても不安ですが、精一杯尽力する所存です。宜しくお願い致します。

(文責 馬場友治)

○ カウンセリング特別講座「発達障がいと不登校」

講師：FR教育臨床研究所所長 花輪敏男 先生

6月4日、栃木県支部総会に引き続き、カウンセリング特別講座が教育会館小ホールで開催されました。講師は、発達障がいと特別支援教育のエキスパートでFR教育臨床研究所の所長を務められている花輪敏男先生でした。

花輪先生は、とてもユーモアがあり、お話も明解で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。「不登校対応チャートワークショップ」として行われる20時間以上の講座を2時間半に詰め込んでの講演だったこともあり、大変濃い内容でした。

先生の提唱する「FR式不登校対応チャート」をもとに、ほんの触りですが、以下のようなお話をいただきました。

- ・発達障がいの子どもたちにとって、学校は困難な場所である。集団生活や教師からのストレス、人間関係や学習の困難さなどで、いじめ、体罰の対象になりやすく、学力不振にも陥りやすく、不登校のリスクは高い。特に、学校でも、就業でもうまくいかず、支援が大変なのは、自閉症スペクトラムの子たち。
- ・学校で取り組む不登校予防は、仲間づくり(学級経営)、わかる授業、自ら進んで学ぶ力など、当たり前のことをしっかりやること。
- ・不登校は故障して動けない車ではなく、ガソリンが少ないだけ。ガソリンが少ないから動けない、動けたとしてもすぐに止まってしまう。それに対して、学校も家庭もガソリンを入れずに、何とか動かそうとしていた。ガソリンは何かイベントで入れるのではなく、日常生活の中で入れる必要がある。学校と道路でつながっていないとダメ。
- ・不登校対応の中核は学校の先生が担うべき(子どもへのアプローチや家庭へのアドバイス)。スクールカウンセラーや専門機関の役割は、学校の先生に対応の内容やタイミングをアドバイスすること。日本のしくみでは、心理の専門家が表に出すぎる。

・不登校の85%は適応指導教室等に行けていない子どもたちであり、家庭の支援（家族がガソリンを注入できるようにするサポート）に力を入れる必要がある。

ほかにも、不登校の子への親のかかわり方のコツなど、多くの相談実践や教育臨床にもとづく示唆に富んだお話をたくさん伺うことができました。

発達障がいや不登校の支援についてニーズのある方、興味のある方は、花輪先生のワークショップ情報や関連書籍をあたってみて、その詳細や神髄に迫ってください。キーワードは、「FR式不登校対応チャート」です。

FR教育臨床研究所：<http://www.frkyorin.jp/index.html>

主な関連書籍：エンカウンターで不登校対応が変わる（図書文化）

（文責 松本直美）

○第28回日本学校教育相談学会総会・研究大会（岡山大会）

～大会テーマ「感じ、気づき、考え、学ぶ 学校教育相談の新たな潮流を創る～」

期日：8月5日～8月7日

会場：岡山市ピュアリティまきび（公立学校共済宿泊施設）

1. 総会報告＜会長挨拶＞

栗原慎二会長から挨拶がありました。要旨は次の通りです。

・会員の高齢化に伴い会員数の減少が著しい。平成17年度の3500人から今年度は約1000人減少して約2400人。このまま10年後に1000人を切ったら現在のサービス、活動は切れてしまうというリスクを認識してほしいと訴えました。

・生き残るためには抜本的な改革が必要。今後の流れとして「現場の先生が心理、教育、福祉をどのようにマネジメントして、コーディネートできるかを支援できる学会にしていきたいと抱負を述べました。

・総合的、抜本的に改革するために本学会を法人化し、一つの方策として教員免許更新に関与していく方向を模索し、間もなく押し出されるチーム学校に積極的に提言、実践を積み上げ本学会の存在意義を高め、困っている先生方の方になることをめざすことを力強く推し進めることが大切。ここ数年の活動が本学会の将来を決める「ラストチャンス」だと参加者にハッパをかけました。

・教育に関わる政治、政策を動かすには諸団体の「質と規模」が担保されねばならない。幸いにして我々の学会も所属するスクールカウンセリング推進協議会は20000人の会員数を誇り、臨床心理士会と同じように文科省は見ている。相談学会そのものは相手にしていないが一般社団法人化した連合諸団体のスクールカウンセリング推進協議会の活動いかんによって生き残る道は開かれると考えている。私は楽観視しているという結びがありました。

（文責 柴 一彌）



2. 『文部科学省講演』報告

演題：「学校教育相談の体制の充実」

講師：坪田知広 氏（文部科学省初等中等教育局児童生徒課長）

＜要旨＞

・ふわふわして心地よかった小学校時代が威圧的な中学校生活に急変するような学校間不一致は絶対ダメ。高校進学に向けて「内申書に響くぞ」などという威圧的指導はもってのほか。

・SC、SSWを教員に奮起してもらおうための人材として考えてもらいたい。専門家のワザを一般教員は盗んでもらいたい。

・sexual-gender-identity、40人に一人の確率と言われるいわゆるLGBT（セクシャルマイノリティ）への対応が急務になっている。多目的トイレの設置や、修学旅行時の対応など具体的な措置が急がれている。

・いじめ防止対策推進法が施行されて3年目。見直しを始めている。悩みのない子はいない、体制が整えられ相談回数が多くなっているのは当たり前、問題を未然に防止することが大切、ことが起きてからの「謝罪の会」はしないですむように取り組もう。

・いじめ、虐待、貧困、不登校という今の流れの中、特に不登校は問題行動と捉えるべきでない。小学校高学年までには90%以上の子ども達がいじめなど何らかの体験をしている。チーム支援・教育というツールを推し進め、行き

たくなるような学校になる新しい支援を早くしなければならない。年間単位の指導計画でなく学期単位で考えるということもあると思う。

・今後教育分野でも公認心理士がベースになるだろう。しかし、上乘せキャリアとして先生方が積み上げてきた実践蓄積が尊重されなくてはいけない。平成31年度までに新しい支援制度がスタートするだろう。

(文責 柴 一彌)

3. 『記念講演』 報告

演題：「感じ、気づき、考え、学ぶ、新領域【サイバニクス】からの提言」

講師：山海嘉之 氏（筑波大学大学院システム情報工学研究科教授・筑波大学サイバニクス研究センター所長）

<要旨>

- ・重介護ゼロの社会をめざす開発研究を担当。
- ・ハンター社会 (society1)、農耕社会 (2)、工業社会 (3)、情報社会 (4)、サイバニクスシステム社会 (5) という進化の捉えかたをする。サイバニクスシステム社会とは情動的インタラクションと物理的インタラクションの融合・複合を指す。
- ・人の身の丈を超えてしまった情報社会から人間観、倫理観、世界観をしっかり捉えたグローバルヘルスをめざしている。
- ・介護を必要とする人の残存能力をサイバニクスシステム（支援デバイスHALというロボット）で支援し、機能再生を実現し、人間とロボットを密着させ、人間がいないと動かないロボット、ロボットがいないと動かない人といった関係になると思う。
- ・その人が感じ取ったわずかな情報からその人の内部を推定して日常生活を取り戻す支援をすると、人は喜び、希望を持ち、さらに積極的に再生を願うようになる。そのやりとりをサイバニクス支援デバイスのHALは患者からのレポートと認識して支援をもっと前に押し進めるようになる。つまり、身体、メンタル、テクノピアサポートが相互に支援し合う関係性が生まれることになる。
- ・このシステムはロボットの介在はなくても教育相談という領域ですでに実践されているのではないか。先生方が子ども達と心を通わせ、共に感じ、やりとりをしながら、共に進み日常の生活支援につなげていく活動。これはサイバニクスシステムと共通するものだ。

(文責 柴 一彌)

4. 夏季ワークショップ報告（8月5日開催）

① 学校におけるストレスマネジメント教育（Bコース）

講師 藤原忠雄 先生（兵庫教育大学大学院教授・日本学校教育相談学会副会長）

・成瀬悟策博士が脳性麻痺児・者の動作改善目的として開発した動作訓練は全人格的成長を促す心理療法として健康増進のための健康法として発展して来た。

・学校教育相談の領域（学習、進路、適応、健康）の「健康教育」は子ども達が一生を通して質の高い人生を送ることができるようになることを目的とした教育活動であり、その中にライフスキル教育（日常生活におきる様々な問題に対して建設的、効果的に対処するために必要な能力）があり、そこに含まれる能力の一つに情動への対処、ストレスへの対処がある。二つを合わせてストレスマネジメントという。

・ストレス対処法の習得には4つある。心身のリラクゼーション、心理的構え（背負い込まず、とらえ方を変える）、コミュニケーションスキル（しずかちゃんタイプがよい）、生活様式。

・いつでもどこでも使えるセルフリラクゼーションは身体的側面からのアプローチであり取り組みやすい。ペアリラクゼーションは声かけ、手を添え、支えるという体験を通して援助関係、信頼関係を構築することにもなり、学校現場には意味のある必要な体験である。

・心身のリラクゼーションとして学校教育現場で簡単に使えるものが「肩の弛め」と「呼吸法」がある。

・「肩の弛め」は肩の上げ下げ、肩の開き（肩胛骨）を行い、緊張の後の弛緩（一気に、あるいはゆっくり）体の部位一点に気持ちを集中してゆるむ感覚を大切にすること。集中力が着き、学力もつく。（この動作はペアリラクゼーションでも体験すべきと藤原先生は強調）

・「呼吸法」は過呼吸対策にも使え、穏やかな気分になれているときに腹式呼吸を意識して行うとよい。腹式呼吸は怖れ、怒り、不安感情から落ち着いて穏やかな気分を誘発してくれ身体を緩ませてくれる。吸気より呼気に意識を持っていく。吸気は鼻から自然に任せ、呼気は口をすぼませて吸気の2倍をかけておこなうとよい。

*久しぶりに自分の体の部位に意識を持っていく感覚を体験でき、一つひとつのワークに時間をかけて取り組めたので効果抜群でした。背景の理論も腑に落ちることばかりでした。

(文責 柴 一彌)

② 学習する集団作りを考える～共同学習の原理と導入～（Cコース）

講師 高旗浩志 先生（岡山大学）

4～5名のグループをつくり、いきなりグループワークから始まった。「個を生かす学級集団づくり」ということをテーマに、具体的な行事に生徒にいかに取り組ませるかを話し合うことから始まった。うまくいっていない具体的な事例をあげて問題点を検証し、よりよい改善策を作るためにどのように発想が変わる必要があるのか、どのような工夫が必要になるのかといった点について話し合いが持たれた。各班から様々な改善策が提案され、みなさん真剣に取り組んだ。それぞれ各自今まで自分の中に蓄積してきたものを総動員して。そしてそれこそが協同学習のあるべき姿なのだと気付かされた。

その後、ある小学校の先生の授業実践の様子がDVD映像で紹介された。協同学習に取り組んでいる算数の授業であったが、一見、なにげなく授業が展開されているように見えるがよく観察すると実に細かい配慮や工夫がなされている授業であった。児童が課題に取り組んでいる時に先生がなにげなく言葉かけをしているが、それは実に深い思慮のもとに行われている。

最初のグループワークのテーマと同じように、どの児童も目を輝かせて授業に参加し、課題に取り組み、自分なりに考えたことを発表している。間違った答えを言うてしまうことをまったく恐れない、積極的な姿勢が見られた。どんな答えでも意見でもみんなに受け入れられる（もちろん先生にも）という安心感がある。一人ひとりの考えが尊重されるというルールが醸成されているのだ。これこそが最初のグループワークの目指すものであり、協同学習の目標のひとつなのだろう。そしてそれは特別なものではなく、どんな授業でも学級活動でも本来目指すべき姿であり、子どもたちが互いに刺激、協力し合って成長していく学校の姿なのだ。

高旗先生によれば、そのような授業実践をしている教師は全国にいる、また過去にもあまたの教師がいたという。しかし、それがなぜ引き継がれることなく広がって来なかったのだろうかと考えた時に、個々人の光る実践に頼る教育界のあり方が今のような状況を招いたとは言い過ぎだろうか。（文責 佐藤 幹雄）

5. 分科会・自主シンポジウム等報告

①実践事例・研究発表「発達障害の子は増えているのか？—相談室で対応していて気付いたこと—」

発表者 滝原一夫（前埼玉大学子育てアクセス）

滝原先生は、長年中学教師を務めた後、4年間教育相談室で勤務しました。その実践発表をしました。テーマは「発達障害の子は増えているか」であるが、その結論は自明の理であると思いましたが。実際紀要には、その根拠となるデータが記載されていました。座長の早稲田大学の高橋あつ子先生は、発表はその事に関してでなく相談室に通って来る子ども達に対しての支援方法を中心に発表してはと提案して、参加者も皆同意しました。

最近、従来の発達障害の他に ADHD 様愛着障害や第4の発達障害と言われている虐待が増えています。それらに関して何かヒントが得られるかと思いこの分科会に参加しました。従前の愛着障害は、人との関係を拒絶してしまうタイプと反対に人に対して妙に馴れ馴れしく接するタイプと認知されていました。最近 ADHD 様と言われている愛着障害が増えて来ているそうです。「様」と付いているように、その行動は ADHD と似ていてそうです。それで、ADHD なのか愛着障害か見分けがつきにくいそうです。「第4の発達障害」といわれている虐待は、虐待を受けて成長した子どもは、行動面は ADHD のようで、また脳の CT スキャンで脳のある部分が萎縮しているなどの医学的所見が見られるそうです。発表ではこの事については言及されていませんでしたが、実践の中には示唆される事例がありました。両者とも親の愛情不足であることは、明白です。やはり、その子たちに愛情を注ぐ必要があると思えました。ただ、相談室の1対1の対応でうまくいっても、集団として生活している学校ではそれをどう対処していくかが問題となってくると思いました。（文責 小川 正人）

②実践事例・研究発表「教育相談に活かすソーシャルワークマインド—教育相談の新しいツール—」

発表者 川浦典子（栃木県立さくら清修高等学校）

川浦先生は現役の高校の教師ですが、ソーシャルワーカーの有資格者だそうです。発表内容は、新聞紙上に掲載された川崎事件や銚子事件についてソーシャルワーカーの立場から論じられていました。



私は以前、日本社会事業大学の山下江三郎先生にお話を伺う機会がありました。先生はソーシャルワーカーの理論として、ストレングスモデルを挙げられていました。これは、「問題点より可能性に焦点を当て、それを伸ばしていこうとする考え方」だそうです。これは、正しく「教育」そのものだと思います。次にエコロジカル・モデルで、人は環境と相互に影響し合いながら生きて

いますが、問題も人と環境との相互影響によって生み出されるそうです。だから、個人だけを問題の原因として決めつけるような考え方はしないそうです。とかく、教育は個人の問題として捉えがちです。(個人以外としてせいぜい親程度まで) この視点は、教育にも必要だと思いました。

最後に、山下先生はスクールソーシャルワーカーの問題点として、認知度が低いことを挙げられました。ソーシャルワーカーの資格を有している川浦先生の今後のご活躍を期待いたします。(文責 小川 正人)

③実践事例・研究発表「生徒指導研修が仕事メタ認知と教師効力感に及ぼす影響」

発表者 中林浩子(新潟市立大形中学校) 沖林洋平(山口大学教育学部) 栗原慎二(広島大学大学院教育学研究科)

先生方にとって本当に役立つ教員研修はどのようなものであるべきかが明確に示すことがこの研究発表の眼目なのだとは捉えた。基本的にはMLA(マルチレベルアプローチ・日本語では包括的生徒指導)の実践の仕方を学んでもらう研修を企画して実施した結果、どれほど研修の効力感が増したかということを検証するという内容である。MLAについては、月刊「学校教育相談」に連載中であるからご存知の方も多と思われる。この研修は、生徒指導の対象を全ての子どもとして一次的生徒指導(自分で頑張る力を育てる)、二次的生徒指導(友だち同士で支え合い高め合う力を育てる)、三次的生徒指導(子どものニーズに応じて教師・専門機関・保護者等が支えきる)の3層構造を仮定し、それぞれに特化した研修プログラムを構成することによって、受講者が3層全体を包括的に理解することも研修の基盤的理念としている。

新潟市教育相談センターで実施された教員研修プログラムは17回合計72時間であったが、栗原先生の解説によると、108時間が最も望ましい研修時間であるとのことであった。その内容は、カウンセリング基礎理論、アセスの読み取り方、学級づくり、校内組織体制づくり、愛着と発達支援、2次・3次支援、交流分析、構造分析・機能分析、非行臨床、ピア・サポート、協同学習、その他、非常に多岐にわたる内容である。上記に示したのは内容のほんの一部である。研修時間は、未実施、30時間未満、60時間未満、60時間以上の4つのカテゴリを設定し、校種、因子別に分析を行った。とある。60時間以上で効力感が上がるという結果が出たとグラフをもとに説明された。

なによりも心に残ったのは、栗原先生の次の言葉である。

「今まで各自治体単位で行われてきた教員研修によく見られるパターンは、いじめ自殺があったからとか発達障害の子が増えたからなどのトピック的なことを取り上げて文科省からの通達のもとに実施されるというものが多かったのではないかと。それでは本当の教師の力量は上がらない。」

一部私の脚色もあるが、大体上記のような内容だったのではないかと思う。私にとっては目から鱗が落ちた瞬間だった。非常に多くの研修が実施されているのにもかかわらずいじめはなくならないのか、不登校の発生率は下がらないのか、学校現場は変わらないのか腑に落ちた思いであった。簡単に言えば、ほとんど対症療法的な単発の研修では本当の教育に携わる力はつかないのだ。教育界の末端に携わる者としてこれからの自分の立ち位置とそれに基づく行く末を深く考えさせられた研究発表であった。感謝。(文責 佐藤 幹雄)

6. 自主シンポジウム

「チームとしての学校を機能させるためのマネジメント～教師カウンセラーに期待される役割～」

企画者 三枝由佳里(大阪市教育委員会) 中村 健(立命館大学)

指定討論者 中村 健(立命館大学) 話題提供者 山本早苗(日置荘小学校) 三枝由佳里(大阪市教育委員会)

このシンポジウムの主旨は、教師カウンセラーが「チーム支援」をマネジメントした事例を紹介しながら、「チームとしての学校」を有効に機能させるために必要なマネジメントや、教師カウンセラーに期待される役割について、協議するというものであった。大阪府のA小学校では、「子ども支援委員会」でアセスメントを行い、支援方法を検討、決定している。会議に参加するのは、コーディネーター・管理職・児童指導主任・養護教諭・各学年代表である。課題状況に応じて、中学校区に配置されているスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにも参加を要請し、専門的アドバイスを受けながら情報を共有している、とのことであった。また、定例会は月1回、誰でも参加可ということであった。

いくつかの事例が紹介されたが、どの事例においても校内の支援委員会(特別支援サポーターや特別支援コーディネーターを含む)のメンバーの他に、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、ときには市教委の巡回アドバイザーも加わって会議→支援が行われたことが報告された。チーム支援が見事に機能しているという報告だった。その中でも教師カウンセラーの役割は重要であり、それに伴い、経験、知識、幅広い視野に基づくマネジメント力が必要とされ、その力を磨き、蓄積しなければならないポジションなのだと実感した。

(文責 佐藤 幹雄)

※第28回日本学校教育相談学会総会の支部会代表者会議において、栃木県支部の柴一彌理事長が、北関東ブロック長に選出されました。

○ とちぎ教育相談カフェが始まりました

学級経営や生徒指導、教育相談、特別支援教育など学校教育活動に関する様々なことについて「もっと気軽に学びたい」というご希望にお応えして、本年度は3回の「とちぎ相談カフェ」が企画されました。

第1回は去る7月9日（土）に実施されまして、テーマに関心を持たれた会員17名が集って、学び合いの場が持てましたので、その様子をお知らせします。

テーマ「クラスの子どもたちをつなげたい Q-Uはやったけど、次にどうする？」

ファシリテーター 松本直美 壬生町立稲葉小学校教諭

内容

1. アセスメントにもとづくグループアプローチによる学級づくり→学級担任の実践例
2. 事例研究会を活用したチームで取り組む学級経営→特別支援教育COの実践例
3. 教育相談カフェ
(参加者で、Q-Uの次の一手など、悩みや取り組みについて語り合い、共有化しましょう)
☆次回11月は「対人関係ゲーム」など集団遊びによる仲間づくりについて学び合う予定です。



松本先生は、学級経営とQ-Uについての理論を丁寧に説明された後、アセスメントにもとづく学級担任の実践例も紹介してくださいました。また、チームで取り組む学級経営についても、事例研究会の実際を取り上げながら分かりやすく伝えてくださいました。参加者からは日頃感じていた疑問や困難が出されて、質疑応答や意見交換の良い機会となりました。

<今後の予定>

第2回 平成28年11月26日（土）14時～16時 青少年センター第1研修室

「クラスの子どもたちをつなげたい～集団遊びをカウンセリングに～」 伊澤 孝（陽南小学校教諭）

第3回 平成29年2月25日（土）14時～16時 青少年センター第1研修室

「知っている気持ちになる～選択理論心理学～」 伊澤 裕（晃宝小学校教諭）

☆各回共に、事前申し込みは必要ありません《当日、直接会場におこしください》

☆各回、参加費 500円が必要になります《当日集めます》

（文責 高松千恵子）

○ 栃木県支部事務局からのお知らせ

***平成28年度事業計画**

開催期日	事業名	会場	備考
10月8日(土) 13:30~16:00	【第30回支部研究発表会】 *コメンテーター 毎澤 典子先生	栃木県教育会館2F 小会議室	発表者を募集 しています。
11月12日(土) 13:30~16:00	【第31回支部研究発表会】 *コメンテーター 築頼 のり子先生	栃木県教育会館2F 小会議室	
12月3日(土) 13:30~16:00	【カウンセリング特別講座・合同研修会】 講演「心の病を通して見えるもの」 講師 石川 うた先生	栃木県教育会館 5F小ホール	宇都宮こころの クリニック院長
1月7日(土) ~8日(日)	【日本学校教育相談学会・第28回中央研修会】 シンポジウム 「合理的配慮にみられる理念と教育相談」 基調講演 涌井恵 (国立特別支援教育総合研究所主任研究員) 「プレ講座・3コース」 「コース別講座・7コース」	オリンピック記 念青少年センタ ー	
1月28日(土) 9:30~15:30	【発達障がいセミナー】 「支援をしていくために—自己理解を深め、ストレスを減らす」 講師 高山 恵子 先生	栃木青少年センター 研修室	
2月4日(土) 13:30~16:00	【精神医学特別講座・合同研修会】 講演「感情を巡る冒険—恨みと羨みの心理学」 講師 澤田 匡人 先生	栃木県教育会館 5F小ホール	宇都宮大学 教育学部准教授

<皆さんの参加をお待ちしています>

- * 『支部研究発表会 (11月12日)』 発表者募集!
- * 『とちぎ教育相談カフェ』 会員でない方もどなたでも!
- * 『北関東ブロック研修会 in 群馬・前橋』 別紙をご覧ください。

※ H28年度の会費の納入をお願いします。本部の口座へ振り込んで下さい。



岡山後楽園

日本学校教育相談学会栃木県支部

〒320-0066 宇都宮市駒生 1-1-6 教育会館内
栃木県連合教育会相談部

日本学校教育相談学会栃木県支部事務局 (中山芳美・高松千恵子)

TEL 028-621-7274 FAX 028-627-5682

E-Mail : soudan@tochigi-rk.jp

ホームページ : <http://t-soudan.sakura.ne.jp/index.html>

(会員の部屋パスワード tb-jascg3123)

発行責任者 柴 一彌

広報担当者 馬場友治・平峰孝二・松本直美